

伝統三芸能へのいざない

—能楽・文楽・歌舞伎の普及・支援

関西発祥の伝統芸能である能楽、文楽、歌舞伎は、ユネスコの世界無形遺産に宣言され、その卓越した芸術性は世界に広く認められている。この伝統三芸能を生かした関西の魅力づくりと地域のイメージアップをはかるため、当会は2000年以降、普及・支援事業に取り組んできた。

これまでの取り組み

—入門ビデオ制作、鑑賞支援など

能楽・文楽・歌舞伎はともに世界が認める文化芸術であるものの、現代の日本社会ではこのような伝統文化に触れる機会は少なくなりつつある。グローバル化が進む現代だからこそ、世界から尊敬される日本・関西の個性を表現する意味は大きい。伝統三芸能を将来にわたって日本の文化として次世代に引き継ぐとともに、世界に発信し続けることが極めて重要になっている。

当会では、次世代への継承のための取り組みとして、2005年に学校向け入門ビデオを制作し、大阪府・大阪市の小中学校に寄贈した。以降、三芸能に接する機会の少ない層に対する普及促進を目的に、社会人向けの文楽の鑑賞教室や歌舞伎の鑑賞応援など、伝統芸能の普及支援に取り組んだ。

【三芸能のミニ歴史】

能楽：

南北朝から室町初期にかけて発達し、江戸中期に様式がほぼ完成した。能楽は明治期以降の呼称で、それまでは猿楽と呼ばれていた。

文楽：

江戸時代に成立。人形と義太夫節が合体して成立。

歌舞伎：

1603年成立。出雲阿国が京都で初めてかぶき踊を興行した年をもって成立とする。

伝統芸能連続講座

—『伝統“三芸能”へのいざない』

2008年には新たな切り口として、企業人向けに伝統三芸能の連続入門講座(計5回)を開催した。ビジネス内外で国際交流や社会人としての幅広い教養形成に役立てていただくことが狙いである。

第1回は序論として、講座全体のコーディネーターでもある立命館大学文学部教授の赤間亮氏が、歴史的な概観、さらには現代における伝統芸能への関心の高まりのきっかけとして外資系企業のテレビCMに伝統芸能が使われた例を紹介した。

第2回は、能楽ジャーナリストの石淵文榮氏から「能の楽しみ方」と題して話を聞いた。京都の古寺の庭園を例にとった「庭を見ることと能を見ることは似ている」といった鑑賞の姿勢、能面・装束の特徴や歴史など能の特性について掘り下げた説明を受けた。

第3回は、立命館大学産業社会学

部教授兼雑誌『上方芸能』編集代表の森西真弓氏から「歌舞伎の楽しみ方」と題して話を聞いた。森西氏は、歌舞伎の歴史から舞台機構、演目の種類、演技・演出、現状までビデオを交えながらわかりやすく、かつ印象的に解説した。

第4回は、雑誌『上方芸能』編集長の広瀬依子氏から「文楽の楽しみ方」について話を聞いた。広瀬氏は、文楽の歴史、楽しみ方、舞台・人形の特徴、作品の特色などを説明。文楽の歴史は平安時代の傀儡師にさかのぼることや、上演演目の選択が重要視されることが多いという点で、現代の「劇団四季」にも通じるとするなどの話題を提供した。

第5回は、コーディネーターの赤間教授を案内役に、シテ方観世流能楽師上野朝義氏による「能のワークショップ」を行った。「高砂」の一節である「千秋楽」の段の謡い方や能面の特徴についての解説に続き、参加者はグループ単位で仕舞を体験した。また、実際に能面をつけ、能の



第1回 赤間亮教授



第4回 広瀬依子編集長

演者がいかに制約された視野の中で演じているか、その演能の難しさも体感。まさにワークショップでなくては経験できない講座となった。

今回は少人数でのトライアル事業ということもあったが、出席率は全5回で95%と皆熱心であった。

■参加者の熱心さはうれしい驚き

一赤間教授の談話

コーディネーター・第1回・第5回講義の講師を担当し、交流会にも出席し多くの参加者と会話しましたが、企業人で入門編に参加する方がこんなに熱心だとは思いませんでした。通常は、質疑応答でも内容と関係のない質問が出たりするのですが、今回の参加者は伝統芸能の内容に集中しての質問で、驚きでもありました。今後も多くの企業人の方に伝統芸能に触れていただき、海外の方や関西の外から来る方との交流に役立てていただきたいと思います。

■参加者の声

能、狂言が好きなので、能のワークショップに参加した。講師は例え話などを取り混ぜて説明され、よく理解できた。体験して、普段の所作のだらしなさを痛感した。伝統芸能に触れ合う機会を今後も増やしたい。

(40代 男性)



第5回 能面をつけて視界を実体験

毎回「へ〜〜!」と思う話の連続で、観る際の興味が膨らんだ。能の「千秋楽」の「仕舞体験」はすばらしい! 少しコツを会得しました。日本男児として、社会人として、ちょっと「深み」が増したような気がします。

(40代 男性)

今回受講して伝統芸能のひろがりや奥の深さを、多彩な講師陣から学ぶことができた。あらゆる場面で日本の独自性を考えるヒントになるのではないかと思います、さらに深く学んでいきたいと思う。(40代 男性)

【連続講座アンケート結果】

- ①講義の内容について
よくわかった(93%)
- ②レベル
適当(94%)
- ③伝統芸能について興味を持った?
持った(99%)
- ④今後の伝統芸能に触れるに当たって役立つか?
役立つ(99%)
- ⑤国内外からの関西への来訪者に案内などに役立つか?
役立つ(80%)
- ⑥三芸能の観劇をした事があるか?
ある(88%)
- ⑦チケットの入手について
購入している(50%)
招待券(50%)

WEBへの取り組み

また、当会では関西伝統芸能のウェブサイトを立ち上げた。伝統三



第5回 上野師に合わせ仕舞の体験

芸能関連のサイトは、各団体・企業や演者・俳優の個人ホームページ、ファンが作成するサイトなど数多くのサイトが存在している。しかし、初心者にとって伝統三芸能を簡単に理解しいろいろなサイトにつながっていくものはない。そのため、初心者向けウェブサイトとこれにリンクした関西地区での伝統三芸能の公演情報のサイトを整備した。

おおさか・元気シリーズ 連携支援

大阪府が主催している「おおさか・元気・伝統芸能」との連携も活動の一つである。関経連では過去に府下の市町立の小中学校、私立学校向けに伝統芸能のビデオを寄贈しているが、大阪府より、「おおさか・元気・伝統芸能」の事前学習用、それも生徒だけでなく教員用に有効という話があり、3年前より連携を実施。四十歳前半までの教員は義務教育で伝統芸能に触れる機会が少なかったという事情もあり、ビデオは生徒に教える前のツールとして有効に活用されている。今年も文楽を13校、能・狂言を17校に寄贈し、約3,100人に活用された。大阪府の事業は今年で一区切りとなるが、将来子どもたちの記憶に残ることを願っている。

2009年度については、08年度試行した連続講座の評価をふまえ、連続講座の本格開催、そして、伝統芸能に関する講演会も開催し、関西のブランドでもある伝統芸能の普及・支援を続けていく予定である。

(地域連携部 天野博介)